

目次

- 1 はじめのうた
- 2 季節のカード (ことば編)
- 3 童謡 虫の声
- 4 回文 菊の茎
- 5 今月の詩 流星 島崎藤村
- 6 たし算 7の段
- 7 ことわざ 笛吹けども踊らず 豚に真珠 へそが茶をわかす
ペンは剣よりも強し 仏の顔も三度
- 8 かけ算 8の段
- 9 俳句 松尾芭蕉 高井几董 田川移竹
- 10 かぞえうた 3本 6本 9本 (団子)
- 11 なぞなぞ
- 12 手あそびうた 八百屋のおみせ
- 13 今月のうた 慣用句のうた
- 14 慣用句 肝に銘じる 顔が売れる 舌を巻く
- 15 イメージトレーニング スティーム (第7話 第10惑星)
(イメージしてみましよう)
- 16 おはなし 海彦山彦
- 17 漢詩 咸陽城の東楼
- 18 百人一首 源兼昌 恵慶法師 藤原清輔朝臣 西行法師
- 19 復習コーナー
- 20 暗示 (静かなところで目を閉じて聞きましょう)

きく の くき
菊 の 茎



ながれ ぼし
流 星

しまざきとうそん
島崎藤村

かど い だ
門にたち出で たゞひとり

ひと ま がお
人待ち顔の さみしさに

そら
ゆうべの空を ながむれば

くも やど す て
雲の宿りも 捨てはてゝ

なに ひと よ
何をかこいし 人の世に

なが お ほしひと
流れて落つる 星一つ



ことわざ

ふえ ぶ おど
笛吹けども踊らず

どんなに誘^{さそ}ったりすすめたりしても、これに^{おう}応じて^{うご}動き^だ出さないこと。



ぶた しんじゆ
豚に真珠

どんなに^よ良いものでも、その^{かち}価値の^{ひと}わからない人には
何^{なん}の^{やく}役にも^た立たない。



ちや
へそが茶をわかす

おかしくてたまらないこと。



けん つよ
ペンは剣よりも強し

がくもん ぶんがく ちから ぶりよく いたい
学問や文学の力は武力よりも偉大である。



ほとけ かお さんど
仏の顔も三度

どんなに^{おん}穏和な^わ人^{ひと}でも、たびたび^{はら}ひどい^たことをされれば、腹を立てる。



俳句

^{あきふか}秋深き ^{となり なに}隣は何を ^{ひと}する人ぞ

^{まつ お ばしろう}松尾芭蕉



やわらかに ^{ひとわ}人分けゆくや ^{かち ずもう}勝角力

^{たか い き どう}高井几董



けさの^{あき}秋 ^{けむり}たばこの煙 ^{さきと}先飛びぬ

^{た がわ い ちく}田川移竹



なぜなぜ

- 1 あつくなればなるほど、うすくなっていくものなあに？
- 2 やぶればやぶるほどうれしいものなあに？
- 3 ^{はし}走れば^{はし}走るほど、きれていくものなあに？
- 4 いっしょうけんめいがんばっているのに、^{まえ}前へ^{すす}進めば^{すす}進むほど^ま負けてしまうものなあに？



《やおやのおみせ》

- ① やおやさんの
おみせにならんだ
しなものみてごらん



うたにあわせて
手をたたく

- ② よくみてごらん



まわりをみわたす

- ③ かんがえてごらん



かんがえるポーズ

〈リーダー〉

- ④ だいこん
(にんじん、にんじゃ…)

〈みんな〉

- ⑤ あるある
(ないない)

あるかないか
かんがえてみよう

- ⑥ アーア



りょう手を上から
下におろす

《慣用句のうた》

慣用句 二つ以上の言葉が あわさって
もとの意味と 違った意味に なったもの
足が棒になる 足が棒になったんじゃ ありません
足がひどく疲れたこと を意味します

足がでる 舌を巻く 手に余る
目が早い 腰をおる 腹を割る
馬があう 猫のひたい 雀のなみだ

いろいろな慣用句が ありますね



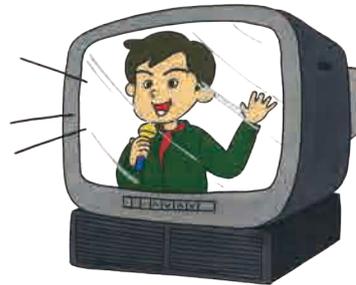
きも めい
肝に銘じる

わす
忘れないように、しっかりと心にとめる。



かお う
顔が売れる

せ けん ひろ し
世間に広く知られる。

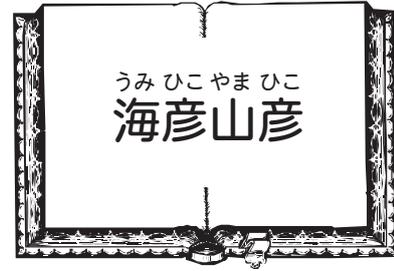


した ま
舌を巻く

おどろ かん たん こと ば
驚いたり、感嘆したりして、言葉がでない様子。

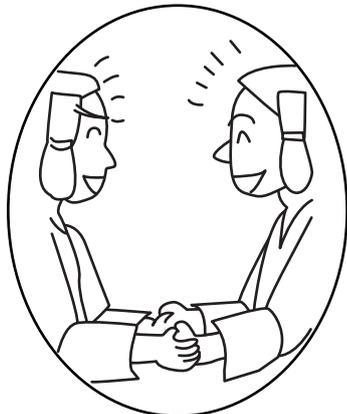


おはなし



「海彦山彦」は、兄と弟が仕事を取り替えたことから始まるお話です。お話を聞いた後で、質問にこたえてみましょう。

- 1 お兄さんの名前と仕事は何ですか。
- 2 弟の仕事は何ですか。
- 3 水をもらったお礼に、弟は何を壺にいれましたか。
- 4 釣り針をのどに引っかけていたのは、何という魚ですか。
- 5 おみやげにいただいた玉は、なんという玉ですか。
- 6 兄の大事なものをなくした弟を、兄は許しませんでした。あなただったら、どうですか。



咸陽城の東楼

許渾

一たび高城に上れば 万里愁う
 兼葭楊柳 汀洲に似たり
 溪雲初めて起こりて 日閣に沈み
 山雨来たらんと欲して 風楼に満つ
 鳥は緑蕪に下る 秦苑の夕べ
 蝉は黄葉に鳴く 漢宮の秋
 行人問うこと莫かれ 当年の事
 故国より東来して 渭水流る

淡路島あわじしま
通ふかよ千鳥ちどりのの鳴くな声こえにに
幾夜いくよ寝覚ねざめぬぬ 須磨すまのの関守せきもり

(源兼昌みなもとのかねまさ)

八重やえむぐらむぐら
しげれるしげ宿やどのの寂さびししきにきに
人ひとこそ見みえねえ 秋あきは来きにけりにけり

(恵慶法師えぎょうほうし)

ながらへえばば
またこのこのごろややしのしのばればれむむ
憂うしと見みし世よぞぞ 今いまは恋こいししきき

(藤原清輔朝臣ふじわらのきよすけあそん)

嘆なげけとてとて
月つきやは物ものをを思おもはするはする
かこち顔がおなるなる わが涙なみだかなかな

(西行法師さいぎょうほうし)



恵慶法師